

随 想

「先生、研究室で農業の魅力を発信する活動をして良いですか？」2年前、研究室に所属する予定の女子学生からこんな相談を受けた。

経営コンサルタント等として約20年間、民間企業等のさまざまな課題解決をサポートし、大学教員に転じてからも学生たちと共に産学官連携活動を実践してきた。大学教員としては柔軟な方だと自負していた。所属は経営学部、専門分野は企業分析の門外漢である。

学生2名の表情は至って真剣。1名は愛知県出身で大葉農家、1名は徳島県出身で苺農家の娘である。地元を離れて2年弱、自らを育ててくれた農業に経営学の視点で何か貢献できないかと考えたようである。そこからメンバーを募り、地方出身女子学生6名の「農女ライター」が研究室に誕生した。

モノが飽和し、「高品質」「低価格」であれば売れる時代は過ぎた。それに伴い企業経営の現場

では、企業（提供者）主導のマーケティングから顧客（生活者）主体のマーケティングへ移行してきている。企業が成長を遂げるためには、自分たちの得意分野で闘うだけでなく顧客の潜在的なニーズをくみ取り、自社の製品・商品・サービスを生活者がどう利用するかをイメージできることが不可欠となった。

言い換えれば「モノ」主体から「コト」主体の経営への転換である。経営学者のC・K・P



近畿大学経営学部 准教授 松本 誠一

「生活者」と共に価値を創る

け入れられた事例もある。そういった中、われらが農女ライター6名は、旺盛な好奇心だけを武器に農家を訪問、体験を通じて農業の魅力を発信し続けた。そんな中で感じたのが「農業は面白い。しかし、農家の方は謙虚である」ということ。

取材をする魅力的な仕事をしているにも関わらず、農業の大変さを語られることが多かった。「若者の農業離れ」はそういったことからきているのでは

ラハラードは、2000年代に入り、イノベーションの主体は企業だけでなく、顧客と共に創ることを提唱した。いわば「Co-Creation（価値共創）」の時代である。日本でも化粧品メーカーが高校生と共に商品開発に取り組んだり、ビールメーカーが一般消費者と共にビールを作ったりしている。私の研究室でも数年前より、和菓子職人とコラボして若者受けする和菓子の開発に取り組み、消費者に受

けないか。彼女たちはそう考え、農業の新たなイメージを新3K「快適」「かわいい」「かつこいい」と定め、若者にも農業に関心を持つてもらえるよう、農空間でのファッションショーを企画した。作業着や農機具メーカーに協賛を募り、農家へ何度もヒアリングを重ねて農業従事者にも若者にも関心を持つてもらえるイベントを開催した。

まさに農業関係者と若者の価値共創である。ちなみに開催後

1カ月経った今でも、アーカイブ動画の視聴者数は伸び、関心を集めている。

農女ライター6名は今年3月卒業を迎える。その精神は後輩に引き継いだ。そして、大葉農家の娘は4月から地元企業に勤務しながら週末は実家を手伝う道を選んだ。苺農家の娘は、農家が作る日本の農作物をより広く知ってもらうため、大手食品商社に就職、将来は地域農産品の普及に努めたいと意欲を燃やしている。この2年間の活動を通じて、本人たちも農業のすばらしさに気づいたのであろう。活動を見ながら、4年前他界した父を思い出した。戦後の食糧難時代を経験した父は、農業の大切さを若者に伝えたいと考え、農業高校に務めた。難病になり、満身に身体が動かなくなつてからも、常に狭小な畑の農作物の生育に精を出した。門外漢の私も、生活者の視点を保持して、もう一度農業の素晴らしさを見つめなおしたい。

◆筆者の紹介(まつもと せいいち)

近畿大学経営学部准教授兼経営イノベーション研究所研究員。大学卒業後、経営コンサルタント会社に勤務。後年、企業調査会社に転職し、調査部門、企画部門、シネクタック部門に従事。その間、中央省庁や地方自治体の委員などを歴任したほか、全国で講演活動を実施。2014年4月より現職。

企業との連携で大阪産推進 大阪府が事業連携協定

大阪府は、昨年10月25日に（株）ビビッドガーデンと、同29日にやさいバス（株）とそれぞれ事業連携協定を締結した。

（株）ビビッドガーデンとの協定では、同社が運営する産直通販サイト「食べチョク」を活用し、若手生産者を中心とした販路開拓、大阪産の全国販売、消費者が農を体験する機会の創出等の取り組みの推進を目指す。

秋元里奈代表は、「生産者と消費者が相互交流する食べチョクを通して消費者の農業理解の醸成にもつなげたい」と話す。

やさいバス（株）との協定では、直売所や小売店等をバス停と見立てて運行する「やさいバス」について、効率的な集出荷体制の整備、生産者と消費者の相互交流を通じた地域コミュニティの拠点化、食品ロスの削減、脱炭素化等の取り組みの推進を目指す。第1弾は12月より泉佐野市、和泉市、堺市、富田林市、大阪市ルートで運行された。

加藤百合子代表は、「やさいバスは、地域に価値をめぐらせる地産地消の取り組み。利用者の声を反映し大阪らしい取り組みにしたい」と話す。（沼田）